

Title	第1回スピリチュアルケア研究会 「金子みすゞのスピリチュアリティと精神病理」報告（2015年度 聖学院大学総合研究所 スピリチュアルケア研究室 主催）
Author(s)	小森, 英明
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.25No.1, 2015.9 :53-53
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5420
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

2015 年度 聖学院大学総合研究所 スピリチュアルケア研究室 主催
 第 1 回スピリチュアルケア研究会
 「金子みすゞのスピリチュアリティと精神病理」 報告



発題者：窪寺俊之先生（上段中央・下段右）

7月22日の水曜日に、駒込の聖学院新館にて本年度第1回目のスピリチュアルケア研究会が開催された。参加者は5名であり、発題者は研究室長の窪寺俊之教授であった。

窪寺先生は本発表の目的を「若くして自死へと至った詩人、金子みすゞ（1903～1930）の生涯に焦点を当て、彼女の精神病理を分析し、宗教の果たした役割を明らかにすることにある」と謳われている。ともすれば、礼賛一辺倒に偏りがちな一女流詩人の境涯を、醒めた視点から、しかも無私のメスを入れることにはかなりの勇気が要る。今回、私は、その鮮やかなメス捌きを目の当たりにできた幸運に感謝している。

まず、＜金子みすゞのスピリチュアリティは、宗教的感覚に優れているが信仰心にはなっていない＞という指摘が印象的である。これは、一般的な多くの日本人が、来世や霊魂の不滅等を信じているにもかかわらず、信仰の有無をいざ自らに問われると、咄嗟に言葉を濁す態度に通じてはいないだろうか。この点で、キリスト教プロテスタントの牧師でもあられる窪寺先生が、＜宗教的感覚

＞と＜信仰心＞との峻別に関して、極めて厳しい態度で臨んでおられることがこの私にも感じとられた。浄土真宗の篤信地帯に育ったみすゞではあったが、事実、「救済」「慈悲」「浄土」などの教理的要素に彼女が言及した作品は見られないという。

また、窪寺先生は、みすゞに見られる＜精神病理の特徴＞を＜自己愛性パーソナリティ障害（DSM-V）＞として捉え、彼女の諸作品との照合を試みた上で、＜彼女の作品にはDSM-Vが指摘する自己愛性人格傾向が散見される＞と喝破されている。この＜自己愛性人格傾向＞とは、（先生への確認を怠ったが）一般に言う「ナーシシズム」のことだろうか。

結論として、＜金子みすゞのスピリチュアリティは彼女の精神病理と重なって、自己満足的、自己中心的、自己絶対化的傾向をもって＞と締めくくられている。これは、＜病的スピリチュアリティ＞に与するもので、一方の＜超越的存在への謙遜、他者と自己の相対化＞等の特性を伴った＜健康なスピリチュアリティ＞とは、明らかに質的に異なるものとされる。

さて、この発表の後、梅雨明け直後の猛暑もあつたか、当日の参加者は5名といささか少なかったが、ゼミさながらの活発な議論が交わされた。

会場からは、「みすゞの内的世界を育んだ宗教とは、父性的宗教か、あるいは母性的宗教か」の発言もあり、それは今後の研究に俟たねばならないこと、また、みすゞ同様、自死に至ったオランダ出身の画家ゴッホ（1853～1890）の作品と生涯をめぐっての解釈がやはり難しいこと、とりわけ創造性の横溢こそが彼の作品（例えば「ひまわり」）の魅力の中核を成しており、それが同時に自死の伏線ともなっていることなども話し合われた。

（文責：小森英明 [こもり・ひであき] 浄土真宗僧侶、作家）